

一紅会歴史研究会

「儲けすぎた男」～安田善次郎の幕末維新～

渡辺 房男（日本文藝家協会会員）

- 芙蓉懇談会という組織  
みずほ銀行、沖電気、損保ジャパン、明治安田生命、丸紅、大成建設、サッポロビルなど70社以上が加入。  
これらは、戦前の安田財閥、浅野財閥、大倉財閥らの諸企業が、財閥解体後に改めて集まった諸企業。  
みずほ銀行の前身は富士銀行、日本興業銀行、第一勧業銀行  
主力となる富士銀行の戦前は、安田銀行。  
安田銀行は富山出身の両替商、安田善次郎（1838－1921）が一代で築き上げた日本最大の支店網を持つ銀行である。
- 両替商と善次郎  
複雑な江戸期の貨幣制度。  
（江戸時代の金貨、銀貨、銅貨という三貨制）  
（江戸の金使いと大阪の銀使い）  
1両と小銭である1文との価値の異常なまでの格差。  
（金1両＝4分＝16朱＝銭4000文）  
（1両＝銀60匁）  
（小判を使うことなく一生を過ごした江戸の庶民たち・・・）  
必然的に両替商が生まれ、庶民の暮らしを支える。  
2種類の両替商があった。  
大名や大身の旗本の御用を務める「三井家」「小野家」「島田家」などの本両替商と200軒以上の小銭を扱う銭両替商。  
善次郎は、銭両替商として出発しながら、本両替を目指す。
- 白刃の下の善次郎  
幕末の動乱期、江戸に横行する強盗と辻斬り。  
三井などの本両替商は閉店休業状態。  
数回にわたって強盗に襲われながらも、店を開いた善次郎。  
幕府御用の金貨回収の御用拝命。  
第1の蓄財と出世の糸口を得る。

1/3

- 太政官札と善次郎  
慶応4年（1868）新政府は産業基盤の整備という名目で多額の不換紙幣である太政官札を発行。  
当初の目的を逸脱して、大部分が戊辰戦争の軍事費として使われた。  
恐るべき太政官札の値崩れ・・・。  
善次郎は誰もが安値で手放した太政官札を買い占める。  
政府の威圧的な布告により値を取り戻した太政官札。  
その間、善次郎は多額の札を底値で買占め、次のステップへの経営基盤を構築

- 公債証書と善次郎  
新政府の旧武士階級への様々救済策として、政府は秩禄公債（明治9年）を発行。公債証書の発行により年金化を図った。満期償還で元金を受け取れるが、生活の困窮の中で証書売って現金化を求める下級士族たち。善次郎の試みは、証書の買い上げにより資産を増やすことであった。
  
- 国立銀行と善次郎  
明治5年（1872）の国立銀行条例が布告された。アメリカの銀行制度を模範にして近代的な金融機関として国立銀行（国の法律によって生まれた銀行・・私立銀行）の創業開始。しかし、第1から第5（第3は未開業）なでの4行しか開業しなかった。金兌換制の銀行券を発行したため、多くの人々が金と引き換えててしまう事態となった。慎重な善次郎は、金兌換の危険性を予測し、開業せず明治9年の設立要件緩和の条例改正を契機に善次郎は第3国立銀行の設立を図った。その年12月に、第3国立銀行が開業し、善次郎は頭取となる。以後、全国に国立銀行が創設され、総数153行となる。

2/3

- 安田銀行（後の富士銀行）と銀行王善次郎の誕生  
明治9年（1878）開業の第3国立銀行には、他の出資者が存在した。善次郎が目指したのは、自分自身による銀行の設立であった。三井銀行（明治9年7月開業）に引き続き、善次郎は明治13年（1880）1月1日、安田銀行を開業。銀行王安田善次郎の誕生。以後、太平洋戦争が終わる昭和20年（1945）まで安田銀行は、安田財閥の基幹金融機関として発展。大正12年の預金高5億円強、支店網200余。戦後、財閥解体により、安田銀行は閉業、富士銀行として再発足。現在のみずほ銀行。
  
- 夢に賭ける善次郎  
生命保険事業の着手（明治安田生命の前身である共済500名社を明治13年に創立）。損害保険事業の着手（損保ジャパンの前身である安田海上火災の創業）。浅野総一郎とともに京浜工業地帯の開発を計画（鶴見駅から海沿いに走る鶴見臨海線に今も残る安善駅と浅野駅）。東京から関西への弾丸列車構想。（計画では、東京大阪間を6時間で結ぶ。鉄道省の反対で挫折）

- 後年の善次郎の社会貢献
  - 慈恵会病院への寄付（3万円）
  - 地元の富山職工学校や商業学校生徒への奨学金と校舎建設資金の寄付など（6万円）
  - 日比谷公会堂を含めての東京都市改造計画に寄与。
  - 東大安田講堂の寄付（死の年、100万円）など。  
（100万円は当時の米価で換算すると、約4億円）
  - 大正10年（1921）9月28日朝、神奈川県大磯での不運な死  
（享年84歳）

（以上）